「正直、自分が女の子だったことにすごく感謝してます」
「どうして？」
「久遠先輩に挿入したい。という気分が湧かなくて済みますから」
もちろん、指を扱ってのことはあるだろうが、男の子が扱うようなものに比べてその凶悪性は格段に下がるし、爪先にさえ気を配っておけば怪我をさせるようなことにはならないし、清潔に保っていれば、生命の片割れを袋小路に閉じ込めるよりも安全だ。とはいえ……
「……嗜虐的な欲求が湧いてしまう危険性はあるかもしれません」
東郷はそう言うとぺろりと指先を舐めて、天乃の膨らんだ腹部に縦一本の線を引く。妊婦用の寝間着の上からの為、その生ぬるさは伝わらなかったが、抱く企みに体は微かにびくついて……東郷は笑みを浮かべる。見下ろすその表情には影が差し、闇の中で輝きを放つ瞳、赤く燃えるような舌は怪しく揺れる。そんな東郷の姿はまるで魔女のようだと天乃は息を呑む。東郷が東郷だと分かってはいるのだが、どこか違うのではないかと少しだけ感じてしまう。もちろん、正真正銘の東郷美森だ。ただ、情欲に支配されて普段の落ち着きが亡くなっているだけで。
「東郷……？」
「ふふっ……」
「っ」
白く細くて冷たい東郷の手が頬を掠める。さらりと巻かれた数本の髪が落ち、唇にかかってこそばゆさを生む。カーテンを挟んで隣には夏凜がいるし、東郷自身しっかりと自制してくれる……はず。の為、そこまで緊張しなくて済むはずなのだが、妊娠による心体的不安によって増長させられてしまうのだろう、性的行為の高鳴りに交わって緊張感が弾む。
「や、優しくして……ね……？」
「ぅ……！」
ドキリ。と、東郷の心臓が跳ね上がった。ほんの冗談でサディスティックな雰囲気で始めようとしただけだったのだが、ベッドの上で無防備に体を広げ、赤らんだ表情、怯えた瞳、可愛らしい唇で温情を懇願するという姿は悪意なくとも東郷の体を釘付けにする。それはもはや疑似的な痛みを感じさせる。
「ち……」
「東……郷……？」
「血を吐きそうです……」
「だ、大丈夫なの？ やっぱりやめた方が」
「い、いえ！ 止めたら死にます！」
「でもっ」
「たとえ、例えなので！」
こんな極上の夜食を逃すわけにはいかないというように、前のめりに迫る東郷に対して、そうなの……？ と、天乃は本気で不安そうにする。東郷は自分の胸に手を宛がって、深呼

吸。落ち着け。と声をかけるが、燃料の過剰供給によって心臓は爆発寸前でどうしようもない。好きだとか愛しているだとか。心で感じるものだと東郷は思っているが、下品な言い方をすれば、身体で感じるのもあながち間違ってはいないのではないだろうかと今更ながらに思う。まさに今、東郷は恋愛的な意味での愛を感じていた

「なんだか、新婚初夜な気分がします」

「そう？」

「結婚してから。と、守り続けた貞操。それを今ようやく紐解くことが出来るような……そんな感覚です」

残念ながら貞操を守り続けているわけではないのだが、しかし、いつまでたっても初々しい天乃だからこそ、そんな気分に浸らせてくれる。それは九割性欲で出来た東郷でさえも初心な気持ちにさせて、伸びる手の緊張による震えに気づき、東郷は目を瞑る

「大丈夫です、優しくします」

「う、うん」

元より傷つけるつもりなどない。天乃の妊娠の有無にかかわらず、柔肌に傷をつける事は自分の心が許せなくなる。とはいえ、接吻痕という愛印は別である。一妻多妻を受け入れている天乃の周囲に対して誇示する意味も理由も全くないし、自分が付けた後には愛印は二つ三つと増えていくだけだろうが、それでも、自分の体に残った痕を恥ずかし気に隠そうとする天乃の姿は思うだけで心が揺さぶられる。そんな考えを軽く振り払い、そうっと頬を包み、軽く触れさせるだけの接吻を交わすと、東郷の口元から艶やかな糸が滴って……

「んっ」

導かれるように二人はまた唇を重ねる。ゆっくりと唇がズレて絡まり距離が縮まるけれど、まだ舌がふれあうことはなく、距離を置いて見つめ合う。唇に触れた互いの感触がじんわりと広がり熱を持つ。流れる季節の冷めた空気に触れてなおそれはより体を火照らせ、欲求する。

（好き……久遠先輩が……好き……）

キスをして、ただ見つめ合うだけでも好きだと感じる。女としての部分が、高揚感に押し上げられていく。ほんのりと熱を持ち、潤んだ瞳と無意識な淫靡さを纏う吐息に東郷は喉を鳴らす。ただのつまみ食いでは満足などできるはずがない。それで我慢できるはずがない。妊婦であることで差し引かれてもなお、押し倒してしまいたいという思いが疼く中で、東郷はややぶつかるような形で唇を触れさせた

「んっ……ちゅ……」

「んぅ」

押し付け合うようなやや強引さを持つ東郷のキスに対し、天乃は優しく受け止め柔軟に絡みついて応える。何もかも東郷がしてくれるから、応えることに専念するだけで良い。ぬちゅりと入り込む東郷の舌にあいさつ程度の軽さで触れて、呼吸が止まる。

「んにゅっ……ふ」

「んちゅ……ぁっ、んっ」
呼吸に対する労力さえも、接吻に回す。息苦しさを感じたら離れ、互いの吐息を取り込んでまた重なる。熱を持ったどちらのものとも言えない唾液を飲み下すたびに体は性的行為に適したものへと作り変えられていく。気づいた時には握っていた手を握り合い、淫らな音を弾かせながら離れ、軽快なリズムを奏でてキスをする。
「っは……んっ……久遠先輩……」
唾液に塗れ本来の感触を失った東郷の舌は舌に絡まりその皮を押し付けて脱皮し、僅かにザラリとした固く柔らかな絶妙な肉質で天乃の舌を絞りぬいて全てを奪う。満たされては乾き、飢えて求めた瞬間に飴が与えられる。忙しない性の濁流に体が侵されていくのを感じてなお、抵抗は存在しない。
「っは……」
「はっはっ……はぁ……んくっ」
「ん……っ」
東郷が離れて一呼吸、息を飲んだ天乃の口元から流れ出た唾液を東郷は舐めとって……ほほ笑む。天乃はされるがまま受け取ってくれている。元々大きく膨らんでいた胸がより大きくなって呼吸のたびに魅惑的に揺れる。自分の体も似たようなものであると感じる東郷は、男子生徒からしたら魅惑的で魅力的で性的にたまらないものなのだろうかと客観的に思う。少なくとも、天乃に対しては性的興奮を鞘に納めることは難しいかもしれない。
「まだ、夜は長いですよ……久遠先輩」
まだ始まったばかり。それなのに、身体は出来上がっている。熱っぽく上気した頬、潤んだ瞳、艶がかった唇に吐くと息の生ぬるさ……そして、鼻腔を擽り情欲に絡みつく淫猥な香り。性的鎮静剤を投与されてなお、東郷は激しく脈動する心臓を感じてゴクリと生唾を飲む。どこかでもう少し激しくしていいのではないかと囁きが聞こえる。だが、東郷は首を振って天乃の唇に優しくキスをすると、乱れた横髪を払い除けて、首筋を甘く噛む。
「ひぅっ」
びくっと震え、可愛らしい嬌声が溶け込むのを感じて、東郷は心の中で満足げに笑う。
（可愛い……先輩なのに、たまらなく愛おしい……）
優しく、丁寧に浸透させていく。互いに完璧な満足を得ようとすれば齟齬が生じてくる。であれば、相手のみを満足させるように努めるのが愛する者の務め。尽くし尽くして、自分の手で愛する人が快楽に包まれていく煽情的な姿で得られる精神的な満足感に浸ることに落ち着くのも大切なのだと東郷は思う。ただ、その場合は多少なりとも意地悪な責め手になってしまうのだが、そこは我慢して欲しいと東郷は天乃の首筋に舌を這わせ、噛みつき、声を漏らす口に指を差し込む。
「っ……ぁゅ……ぁっ」
我慢をしようと口を閉じれば指を噛んでしまうかもしれない。だから、閉じれずに快感に振るえる声を天乃は零してしまう。その羞恥、その心地よさに火照っていくのを東郷は感じて

指を引き抜いて顔を覗き込む。唾液の溢れる口元、熱っぽさに伝い落ちる涙、乱れる視線。天乃のことを支配しているような感覚に陥りそうな景色に、東郷は自分の下着がいやらしく湿っていくのを感じる。

「久遠先輩」

「ぇ……んっ……んんっ！」

ベッドに押し倒すような形で馬乗りになった東郷は、腹部を絶対に圧迫しないように細心の注意を払いながら、キスをする。責められて呼吸も整っていない天乃へのキスは、すぐに息苦しさが伝わってくる。天乃の唇が少しだけ抵抗するように動き、舌が騒がしくなってくる。

「んんっ！ んぅ……」

「ん……っふ……」

「はぁっは……はぁ……んっ」

すぐに離れた東郷は「すみません」と囁くように言って、天乃の首筋に舌を這わせる。ほんのりと浮かんだ汗だけでなく、その肌さえも味わうように削るような力強さで。

「ひっ……ぁっ」

「怖いですか？」

「怖いとい……っうかっ」

話している最中でも容赦なく戴く。一週間なにも口をしていない餓死寸前で出された食事を前にして【待て】をすることができるだろうか？ いや、できるはずがない。慌てたらまた一週間お預けを喰らうなどという調教をされているならまだしも、そうではないのならまず不可能だ。

（一週間久遠先輩をお預けされるなんてしたら外でもお構いなしに襲う自信がある）

当然ながら、性的な意味でも性的な意味じゃなかったとしてもだ。天乃が歩いていたら即座に飛びついて会いたかったと頬ずりすることは間違いない。

「んっ……ぁっ」

「久遠先輩の声……本当に甘くて好きです」

「何言ってるのよ」

「冗談じゃないですよ？ 本当に好きです」

真面目な時の凛々しい声、楽しんでいるときの明るい声どちらも大好きだが、エッチなことをしているときの甘く蕩けるような声はもっと好きだった。辛いことも悲しいことも何も考えなくて良い性行為は実に、生物が編み出した最大級の麻薬と言えるかもしれない

（正直、淫らな行為とは無縁そうな久遠先輩の卑猥な声って言う時点で卑怯だわ）

その点で言えば友奈ちゃんも……と考えた東郷は、いつぞやの三人で行った性行為を思い返して心が高ぶる。あの時はまだ無垢だった友奈が一皮むけた瞬間でもあって、本当に楽しかった。本当に心地よかった。あのころと比べれば、天乃も少しはエッチすることになれたように感じる。

「だからこそ……少しだけ、意地悪なことしたくなっちゃいます」
「少しよね？　少しだけ、なのよね？」
「ふふっ、少しだけ……です」
ちょっぴり怯えたように問いかけてくる。そんな仕草が愛らしくて。東郷は天乃の頬に触れると、ゆっくりと滑らせて親指で唇に触れる。にちゅ……と、少しいやらしい音が聞こえる。唇で味わった柔らかで力強い肉感が指先から伝わってくる。反応に困った天乃の表情がかすかに動く
「とひゅ……ごう？」
「久遠先輩……指、吸ってみます？」
「何言ってるの？」
「すみません、つい」
自分が意外にも血迷っていそうなものを感じて東郷は天乃の口元から指を離して、咥える。不思議と甘く感じるのは、愛を感じているからだろうと東郷は思う。
「赤ちゃんがどうやって吸うのか、体験してみたほうがいいと思いまして」
「……貴女がしたいだけじゃなく？」
「一割くらいは」
「九割がどっちなのかは聞かないでおいてあげる」
「やりたいほうです」
あえて聞かないという天乃の配慮を真正面から無碍にした東郷は、にっこりと笑みを浮かべて天乃の寝間着、胸の部分を開かせてインナーをあらわにさせる。白いシャツは乳房の大きさをごまかそうとしているが、残念ながら役者不足。鋼鉄の胸当てでもなければ防ぐことのできない豊満さは、頂上の淫らなシミをより強調する。
「母乳……では、ないんですよね？」
「う、うん」
「まぁ、関係ありませんが」
「ひぅっ！？」
シャツの上から勢いよく吸い込む。じゅるじゅると口が騒ぎ出し、母乳ではない分泌物のかすかな苦みが口の中に広がっていく。けれど、いやではなかった。不味いとも感じなかった。むしろ、天乃の甘さがより引き立つようなそんな感じにさえ感じてしまう。
「んっ……やっ」
「いつもよりいい声ですね」
天乃は胸が弱点だということは周知の事実なのだが、それにしても心地よさそうな嬌声だと東郷は感じたのだ。自分のスキルが上がっているというのならばうれしいが、それだけではないと断定する。
「んっぁっ……ふっ……んぅっ！」
柔らかさと張りのいい弾力の共演、かぶりつきたくなるような天乃の胸は子供ができたこ

とで成長し、母乳を出すための変化が今もなお行われている。その過程で張ってしまい敏感さが増してしまっているのかもしれない。
（絶対に、痛いだなんて言わせない）
少し力加減を間違えれば痛みを伴うことになるだろう。それだけはあってはならない。東郷は自分の心に強くそう決めて天乃の胸に触れると、飲み込まれていく指先に神経を集中してゆっくりと円を描くように解していく。
「んっ……っはっ……」
「胸だけで、出ちゃいそうですか？」
「聞かないで……んっ！」
声を我慢するために固く結ばれた唇、きゅっと閉じられた瞼、汗によって艶がかった肌、手を握る小さな手。かわいらしく、美しくそして何よりも淫らに見える天乃の姿に東郷は下腹部の疼きを感じて、息を飲む。下から横、横から上へ。なでるようなマッサージを行うだけで天乃は淫靡な声を漏らす。答えてはくれなかったけれど、見ているだけで快感が最大値まで引き上げられて行っているのが伝わってくる。
（どれだけ見ても……）
天乃は煽情的だと感じてしまう。お腹が大きくなって、より母親らしくなっていってもなお、いや、だからこそ……かもしれない。女としての魅力は全くと言っていいほど薄れて行かない。妊婦であるという引け目があってなお、情欲がそそるほどには、魅惑的で。
声を抑えようと必死な姿、震える体に、揺れる乳房。いやらしさしかないと東郷は思う。自分の体にも魅力的な膨らみは確かにあるが、そんな物とは比べ物にならない。比べることができるのなら、自分の胸を触っていれば天乃の胸を触っているのと同じような幸福感が得られるはずだからだ。
「我慢しなくても、良いんですよ？」
「だ、だめよ……夏凜に迷惑掛かっちゃう」
「確かに、壁はかなり薄いですけど……」
薄いどうこういうより、ただのカーテンなのだが。東郷は冗談めかして言うと、ゆっくりと口を開く。開かれるのを待ち望んでいたかと言わんばかりに薄く伸びる唾液の糸を容易く引きちぎって、息を呑む
「はぁ……んっ」
なにもされていないのに、吐息が荒くなってしまう。息を呑むその時間が弾む心臓によって体を高ぶらせてくる。ドキドキすることが止められない
「……久遠先輩、自分でめくっていただけませんか？」
「えっ？」
「シャツをぐいって」
東郷の良く分からないお願いに、天乃は戸惑って困った表情を浮かべる。何かしたいなら、東郷に体を預けるつもりだった。なのに、東郷は天乃の手で行ってほしいというのがなぜな

のか分からなくて……それを察したのか、東郷はちょっぴり気恥ずかし気な笑みを浮かべる
「久遠先輩の手で出された乳房を味わいたいです」
「へっ……ぇ……えっ？」
何をさせたいのか、何をさせられるのか分かったのだろう。ただでさえ朱に染まりつつあった天乃は顔をより真っ赤にしながら首を振る
「そ、それはっ、なんか嫌……」
自分で服をめくって相手にしてもらうなんて、まるで自分からそうされたいと求めているみたいで、そうしてくれと願っているみたいで。ただ、されるがままにエッチするよりもずっと、恥ずかしいのだ
「……してくれないと、最後まで出来ないですよ？」
「こんなことしなくたって出来るでしょ？」
「私の気分の問題です」
東郷は悲しそうに呟く。東郷の手が止まり、口が止まり、快感の途切れた体がだんだんと冷めていく。疼いていた下腹部が、口惜しそうに何度も振り返りながら去っていくような後ろ髪惹かれる思いを感じさせる。
「ぅ……」
続きが欲しいか欲しくないかと言われれば、欲しい。夏凜に焚きつけられ、東郷によって引っ張り出された性的欲求はまだ満足できていない。
「では、今日はここまでということで」
「ぁ……」
体に触れていた東郷の体温ですら離れていくその寂しさと切なさが天乃の手を動かさせた
「ま、待って」
「っ！」
声を掛けられ、振り向いた東郷は思わず目を見開き、息を呑む。それでも飲み込めなかった欲求が口元から滴る。
（……なんて、なんて……なんてすばらしいのっ！）
口には出せなかった言葉が心の中で大きくざわめく。真っ赤な表情をしながら、恥ずかしさに目を背けながらも、自分でシャツをたくし上げて、胸を露わにしてくれている。丸みを帯びたきれいな形の乳房に、快感によって立たされた乳頭。緊張感と恥ずかしさから小刻みに震えているのだろう、まるで誘うように揺れる。だが、それでは止まらなかった
「お願い……最後までして……」
「あっ」
泣きそうになりながら、目を向けることはできないけれど頑張って目を向けようとして横目での懇願。そこまで求めてないと叫んでしまいそうな魅力的かつ卑猥で、淫靡な情景はあろうがなかろうがサディスティックな性癖に引きずり込んできそうな危うさがあった

鼻血を出すなんて生易しいものではない。血を吐きそうだと東郷は思った。いや、死ぬかもしれないと思った。
（死んでもいいと……考えてしまった）
このまま死ねば永久的な幸福感の中で余生―死んでいるが―を過ごせると確信できる。もちろん、そうなったら天乃を酷く悲しませることになるので思いとどまったが、一歩間違えれば大往生していたことだろう。
「く、久遠先輩……？　あの、その言葉……いえ、仕草は誰から……」
「貴女がしてって」
「そう……ですか」
何か駄目だった？　と困ったように言う天乃をちらりと見つめた東郷は「いえ……」と小さく呟くと、ごくりと息を呑む。駄目だった？　なにも駄目なんてところはない。無理やり言うのであれば、自分に向かってそんな仕草を見せたことだろうと東郷は嘲笑する。
（ほんとう……女の子でよかった）
もしも男の子だったら押し倒して、揉みしだいて、かぶりついて、吸い付いて、相手のことなど考えることなく襲い掛かっていたかもしれない……いや、それは、女の子でも変わらない
「食べていいですか？　いえ、戴きます」
「ちょっ……っ！」
飲み込んでも潤って渇くことを知らない口を開くと、ぽたぽたと滴った唾液が天乃の腹部に落ちていく。その感覚もあってかびくびくと震えた天乃の揺れる乳房に東郷はしゃぶりつく。じゅるりと空腹の赤子のように勢いよく。自分の唾液に塗れたぷくりとした心地よい噛み応え、舌触りのたまらない乳頭。じわじわと染み出す母乳の試作品が唾液に溶け込んで喉を通っていく。
「んちゅ……ちゅる……じゅっ」
「っ！　んっ……とぅっ……んくっ！」
声を出そうとしても、覆いかぶさるような刺激に甘くなってしまいそうになって抑え込む。ざらりとした東郷の舌の感触に騒めき立つ肌は、元々弱く、妊娠によって敏感になった肌をより敏感に感じさせて快楽に引きずり込んでいく。東郷は大きな赤ん坊になってしまったかのように胸に吸い付き、右手では左胸を自分の物だと言わんばかりに塞いで、鷲掴むようにしながら揉みしだく。それでも痛むほどの力が加わっていないのは東郷がただ本能で動いているからだろう。
「んっ……だめ……っ、とうごっ……っ！」
「あむっ」
「んんんぅっ！」
揉みながら、テクニカルな指の動きで乳頭を執拗に虐める。母乳が出てくることを促すマッサージと快感を引き出す性的な技術。今出てくるのは甘くふやけてしまった恥ずかしい声

だが、東郷はむしろそれが欲しくて、責め立てていく。左胸を手で扱いながら、右胸には吸い付いたまま離れない。擦り揉むような唇の動き、巻き付き、削り、味わう舌に、時折かぷっ……とかみついてくる歯。でも、痛くはなくて、心地よくて、声が出てしまう。我慢しようと口元に押し当てた手が濡れていく。飲み込めない唾液に濡れて、潤った声が押しのけて出ていく。押し寄せてくる快感に天乃の体は震えて淫欲の受け口から性的欲求が逆流して下着を湿らせる。

「……はっ……はぅ……んっ」

「っふぅ……ん」

あふれ出た脱力感に襲われ、数瞬の呆然とした視界に東郷の顔が見える。恍惚とした表情の中、口元がいやらしく艶が買って見える。そして離れたかと思えば鼻を鳴らす東郷に天乃はやめて。と声をかけたが、その時点でもう遅かったのだろう満足げな笑みを浮かべて「好きな匂いです」とこぼす。

「そういう問題じゃないっ」

「そういう問題ですよ」

天乃は恥ずかしがっているが—見ていたいので否定はしないが—その必要はないと東郷は思う。髪を張り付けてしまうほどの汗の匂いも、下着の中に覆い隠された芳香も。甘さがあって、体に染み渡っていく優しさがあって、安心感があって、何より幸福感に満ち満ちている。

「久遠先輩」

「っ」

ベッドに横たわる天乃の頭を撫でるようにしながら髪をかき分け、露わになった首筋へと鼻を近づけていく。入浴による清潔感のある匂いが邪魔をするが確かに天乃自身の体の匂いも感じて……唇だけでかぶりつく。吸血鬼のように吸い上げていくのは女体の柔肌。

「んっ……っ」

「っふ……は」

とろんと微睡みに沈んだような表情で離れた東郷は不意にはっとして首筋に手を当てる天乃を見つめる。無意識だったのだ。あまりにも強大な睡眠欲の前では落葉同然の覚醒の鐘のように、東郷の意識は全く働くことが出来なかったのだ。

「痛かったですか？」

「ううん、平気。少しくすぐったかったけど」

「……すみません、なんだか最近我慢できないことが多くて」

一時は落ち着くような感覚もあったが、最近はあまり我慢しようと思うことがなくなり、本能と言うか煩悩と言うか。直球に従うことが多くなってきている。以前は冗談だった積極的な発言も半ば本気な時も少なくはない。よく言えば天乃が魅力的になったということなのだろうが。

「好きなんです。凄く……我慢できないほどに」

「また魅了の力でも働いているのかしら？」
「いえ、ただ久遠先輩がママになって愛おしさが増しただけですね」
「そ、そう……」
押しの強い口調で即座に否定した東郷に天乃は困った笑みを浮かべて頷く。母親になって性的な魅力が向上するとは一体どういうことなのかと、そう困惑したのが伝わったのだろう、東郷は「女性らしさが増したので」と答える
「綺麗なのに可愛らしくて、性的な経験なんて希薄に見えるのに、母親になった久遠先輩」
「実際は結構乱れた生活なんだけどね」
「実際はそうなんですが、そうは感じないので。気持ち良さに悶えさせたいんです」
あの声が好きというのはそう言うことかと。天乃は理解したくないことを理解して苦笑する。もちろん、それだけ好かれているということなので嫌な気はしないし、自分の体にとって必要なことだから拒絶したりすることもないけれど。恥ずかしい姿が見たいと言われるのはやはり困る
「ということで……これからもう少し激しくしていいですか？」
「優しくして、くれるのよね？」
「優しく激しくが私の心得です」
にっこりと満面の笑みを浮かべた東郷の手が、天乃の腹部に伸びていく。掠めるように触れさせ、ゆっくりと力をかけていく。圧迫することなく子供には負担がかからない程度で撫でると、下へと下って寝間着のズボンの中へと手を入れていく。腹部に触っていると、性的な行為よりも子供に対する愛情でその気分が薄れてしまう。
「……胸だけで、達したんですね」
「っ」
「顔を逸らす仕草も、可愛いですよ」
「ばっ……っん！」
にちゅりと、下腹部から淫らな音が聞こえた。東郷の手が入ったことでできた隙間からとてつもなく卑猥な匂いが溢れ出ていく。半密閉空間で蒸れて混ざった汗と性の匂いは濃さが増していて、東郷を高ぶらせて天乃を辱める。真っ赤になって顔を逸らす天乃のその仕草が、また一段と愛したいという気持ちを強めてくれる。
（愛に下限はあるけれど……上限はない）
ズボンの中に潜り込ませた右手に感じる熱と湿気。指先で触れるぬめりとデリケートな柔肌。わざと音が立つように人差し指と中指を使って割れ目を開いては閉じ、入口に指先を滑らせては、乳房を扱うように優しく揉んでいく。空気と触れ合う淫靡な水がくちゅり、ぷちゅり……と音を立てて卑猥さを増長させる
「んっ……やっ……ぁっ……っ！」
「口を押さえちゃだめです」
「やっ」

東郷の要求は出来る限り答えてあげたいと天乃も思うが、しかし、それだけは聞かせたくなかった。周りに迷惑になってしまう―犬吠埼姉妹の時の夏凛のような―こともそうだが、好きだと言われても自分の淫らな声はあまり聞かせられるものではないからだ。けれど、それは東郷に対しては逆に、火に油を注ぐ様なことでしかない。天乃のズボンから手を引き抜いた東郷は、天乃の匂いが染みついた指先をペロリと舐めて、天乃へと目を向ける。獲物を見つけた肉食獣の瞳だった。

（あくまで、我慢しようとする姿勢も可愛い……でも、だからこそ）

押し通してみたくなる。追い込んでみたくなる。もちろん、身体的にも精神的にも苦痛を与えないという前提条件で。気持ち良くさせて、気持ち良くさせて、それでもまだ、快感を与えて淫らな体に作り替えてみたい

（そんなことしなくても、淫らな気はするけれど）

そう考えた東郷は首を横に振って考えを改める。今は夏凛に焦らされた天乃の性的な欲求を解消するのが目的だ。

「んっ……ふっ……んんっ」

天乃の下腹部の形を完全に学習した東郷の右手は、ズボンの上からでも一番敏感に反応する部分を的確に触れていく。下着を割れ目に押し込むように擦り、ずるりと引き上げて隆起させられた敏感な場所に強い刺激を加える。天乃は口を押えて瞼を強く閉ざしながら、必死に口を押えて声を押し殺す。口元から零れていく飲み込むことのできない透明の液体が、天乃の状態をより明確に表していた。

「っ……んっ」

「ここからが、本番ですよ」

「へ……？」

人差し指から薬指までの三本指で天乃の秘境を捉え、圧し揉むように刺激を与えていくと、中指だけが沈む。湿った布地の感覚が下唇に触れる。割れ目を割いて侵入し、走り抜けて敏感なところを巻き込んで下がっては蛇行させてと変則的な刺激を加えて予測できない心地よさを与える。足を動かすことができない天乃の代わりに、東郷が自分の手で足を開かせていく。天乃の手が阻もうとするが、右手の指先で黙らせる

「んっ……んんっ……ふっ……」

足を開かせると自然な形で秘部が開き、生々しい感触が伝わってきたのだろう、天乃は両手で顔を覆って首を振る。自分がどれだけ恥ずかしい思いをしているのか、どれだけの快楽に塗れているのか体の内側からこみあげてくる心音がより激しくなっていくのを感じる。

（恥ずかしくて死にそう）

けれど、東郷の手がそこで止まることはない。天乃のズボンの腰回りを掴むとぐっと引っ張ってずらしていく。ここまで来ても下着を脱がさないのは東郷の趣味だ

「見てください」

「いやっ」

「下着だけじゃなくて、こっちまで湿ってます」
「言わなくていいから……」
「見てくれないからですよ」
顔をそらして見えないようにしている天乃のすぐそばで囁くように告げた東郷は、ズボンをベッドの横に落とすと、天乃の頬に手をあてがって自分のほうを見させる。真っ赤な顔、泣いている瞳、温かくなった柔らかい頬の心地よさを感じつつ、唇を重ねる。満ち満ちた唾液を混ぜあって舌で掬って戴く。
「んっふぁ……っ」
「ふふ……んちゅ」
唇を重ねて、押し付けて、でも舌が触れあうことはない。キスとしては完成しているのに、中途半端に感じてしまう匙加減。東郷のそんな嫌がらせのような接吻に、天乃は自分の舌を差し出す。そうするべきか、しないべきか、迷いのある接触を感じての東郷の笑みはどこか達成感を感じるもので……けれど、天乃は見えなかったふりをする。いや、気にするよりも感じていたいと思った
「っ……ん」
「んくっ……っふ……」
こくりと東郷の喉が音を立てて、遅れて天乃の喉が鳴る。喉の奥へと流れていくものがある一方で、口元から零れ落ちていくものを東郷の指が捉える。見つめあい絡めあう視線さえも性的な感じがしてしまう数秒間。じわじわと冷えていく下腹部の寂しさに、天乃は東郷の手を握る。
「続きは……しないの？」
「夏凜ちゃんから譲り受けた責務は果たしますよ」
じっと見つめあう一方で動いた東郷の手は、天乃の体を見ていなくとも正確に目的地へとたどり着く。何があるかわからない妊娠を理由に更地に変えられた秘境の地は悦びに濡れて透けた下着の上からでも形がはっきりと見えていた。病院の用意した色気のないものでも、こうなってしまえばただの装飾品と変わらない。
「さすがに、気分も高揚してきますね」
「東郷……？」
「寂しそうな声出さないでください。脱ぐだけですから」
手が離れていくだけで寂しそうに名前を呼ぶ天乃に困った笑みを浮かべながら、東郷は自分の寝間着のボタンをはずし、さっと脱いでインナーまでも外して胸部を露わにさせる。ふっくらとして形のいい実りが垂れ下がって天乃の胸に触れる。先端と先端のあいさつするような接触でさえも、キスのような心地よさが広がっていく。一部の硬さと全体的な柔らかさ。押しつぶされるような圧迫感の中にある柔軟な抱擁感。
「んっ……なんだか、これだけで気持ちよくなれそうです」
「相変わらず、大きいのね」

「吸いますか？」
「貴女じゃないんだから」
「それを言われると、弱いです」
行為の中のつまらない会話。けれど、そのほんの一コマが距離を詰めてくれるのだ。物理的な距離ではなく、精神的な距離感。触れ合う体の相性が、歯車がかみ合うように重なっていくのを感じる。互いの鼓動が胸の先から伝いあって繋がり、重なる。
「本当は、お尻のほうから触ってあげたいんですが」
「んっ！」
「我慢をするお口には、おしおきっ」
かぷっと、鎖骨のあたりに感じる唇の柔らかさと締め上げられていくようなちょっとした痛みと快感。ずるずると血が吸い上げられていくような感覚は内側に響き、それが、快楽神経に流れ込んでくるのだ。痛いのに、心地いい。自分の中にあるマゾヒズムを刺激されてしまいそうな状況に陥体育天乃をさらに追い詰めるように、東郷は下腹部に伸ばした手の休みを解く。下着のざらつきは快楽に湿って感じられないが、その分存在を主張する陰茎をつまむ。
「ひぅっ！ んっ……あっ……んっ」
ぎゅっとつまみながら、ダイヤルを回すような手つきでさすられていき刺激は強く、天乃の声がひときわ大きくはじける。快楽から逃れるように腰が浮いて、東郷の体に接触する。体は正直だと淫らな文学ではよく目にするが、まさにその通りだと東郷は思う。下着の上からでもわかるくらいに触ってほしいと主張するのだから、否定するだけ無駄なのだ。もっとも、天乃は否定などしていないが。
（私も、人のことは言えないのだけど）
ただ責めているだけなのに、下腹部は強く疼く。下着だけでなく寝間着までも好感が必要だとわかるくらいにはひどい状況だろうと、覆いかぶさるような姿勢になっている今、より強く感じる。体が動けば触れる布地のひんやりとした冷たさ、何かが伝って落ちていく陰部の感覚。東郷はゆっくりと腰を下ろすと天乃の下腹部に自分の下腹部を重ねる。本当は全部脱いだり、噛み合わせるような姿勢になるのが正しいというが、そんな下準備がいらないと体が拒んだ
「はぁ……はっ……んっ……はぁ」
「っ……んっ」
声を抑えている天乃よりも、東郷の吐息は荒々しい。それもそうだろう責める一方の東郷は自分で自分をじらし続けているようなものなのだから。天乃の気持ちよくなっていく顔を見ているだけで―その一歩手前までは余裕だが―達することができるほど、上級者ではない。
「久遠先輩……久遠先輩……」
下腹部同士の接吻。布地を挟んではいても、その感触は強く体に伝わってきてくれる。足が

動かせるようになってきた中で最も幸福といえるのが、これかもしれないとさえ、東郷は思ってしまう。それほどまでに、至福だった。ぬちゅり、くちゅりと空気とふれあい破裂していく淫水の音、押されるたびに広がり、閉じてはまた広がる陰唇の感触。触れ合いこすれるたびに流れだしていく性行為の副産物と、流れ込んでくる快感の供給。

「はっ……はっあっんっ！　んっあっ」

「んっ……っ……ぁっやっ……んっ」

抑えようと思っても、だんだんと体の動きが早まっていく。より早く、より強く快感を求める性的欲求が体を無理やりに動かさせるのだ。

（女の子でよかっただなんて……嘘）

性的な行為をしているときは、いつも思う。男の子の性器は挿入するための形をしており、それを扱うことで性的興奮を覚えて、達するという。ならば、天乃の体に挿入できたらどれほど心地いいのだろうかと。自分の体が入っていくことで天乃の普段見ることのできない女の顔を見られるのだとしたら、どれほどまでに幸福なのだろうかと。

「はっ……んっ……久遠先輩っ」

名前を呼びながら、ぎゅっと目をつむる。下腹部に神経を集中して、とても小さなものがつぶれて、擦られ、突き抜けていく快楽を挿入しているかのような感覚へと置き換えて感じる。

「やっあっんっ……とっんっ……あっぁんっ」

「ごめんなさいっ……とまれっなっぁっ……」

「んんっ！」

強く、手を握り合う。より早く、より強くを求めていく結果、胸が重なり合ってまた快楽を孕む。最後まで東郷の体は止まらなかった。自分の体から溜まりきった快楽が流れ出していくのを感じながら、なおも東郷の体は動くことをやめられなかった。まだ、まだ、もう少し……。と、敏感になってなお擦りあって連続的に押し寄せてくる快感に打ち震える

「はっ……はぁっあぁっ」

「っ……ふっんっ……んぅぅっ！」

東郷と天乃の淫らな流れが溶け合って混ざり合う。ほんの数分間のことだった。東郷の体が止まって、二つの荒々しい吐息だけが静かな病室に響いて、淫猥な匂いがあたりに立ち込めていく。

（……でも、男の子がよかった。とも、思っているわけじゃない）

そういう願望がないといえばウソにはなるが、女の子だからこそ苦楽を共にすることができた上に、こうした関係になることができたのだから。

「……」

「……」

見つめあって……そして、ゆっくりと唇を重ねる。何時間でも行為に浸ることはできるかもしれないが、天乃の体のことを考えれば、通常の状態ならば一時間二時間ほどが妥当なところだろう。

「久遠先輩……好きです」
「ん……私も、東郷のことも、みんなのことも好きよ」
もう一度キスをする。離れたらまた、キスをして舌を絡めていく。そうしているだけで、体の高ぶりがゆっくりとバランスよく下がっていってくれるからだ。スイッチを入れるのも切るのもキス。それが、天乃たちのやり方だった。
「いつか、体が元に戻ったら、全員でやりたいですね」
「一週間くらい私にため込む時間を用意してね？」
「みんなも溜まりますけどいいですか？」
「……今のなしでお願い」
「なら……もう一度」
考える間もなく前言忘却を求めてきた天乃に、東郷は苦笑いを浮かべながらそう求めて、月明りの中、唇を重ね合わせた